

16世紀甲武“境目”地域における道と城郭

—多摩川上流域を例として—

武蔵高等学校1年 田中 俊輔

はじめに

東京都奥多摩町から青梅市にかけての多摩川上流域は、戦国時代を通して、国境の地域であった。本論は、国境という特異な地域でありながら、史料の少なさやアクセスの悪さから注目されてこなかった中世城郭を調査し、国境地域特有の利用の形態を明らかにすることを目的とする。また、交通路が重要となる国境地帯においては、道と城郭は密接にかかわっていた。道と城郭の使用形態を考えることで、16世紀戦国期の当地域の様子を明らかにする。戦国時代、このような、敵領と味方領の境となる地域は、「境目」と呼ばれていた。「境目の城」というのは、境目に築かれた城のことで、松岡進や齋藤慎一によって実態が明らかにされてきた（註1）。多摩地域を統治していた戦国大名後北条氏の文書にもしばし「境目」の語が現れる。よって、本論でも国境地帯の意味で「境目」という言葉を使う。

では、本論で扱う城の定義と、これまで行われてきた多摩川上流域の城郭の研究がどのようなものか示す。一般に、中世城郭とは、軍事あるいは自衛のため、戦闘、監視を目的として作られた、堀や土塁など明確な防御構造を持った施設のうち、中世に作られたものと定義され、以上の条件を満たさない居館などと区別される。本論で単に「城」、「城郭」という用語を使う場合、戦国時代に築かれた中世城郭を指すことを断っておく。また、城の名前については、基本的に東京都教育委員会の記述（註2）に従い、同書に収録されていないものは他の参考文献から補った。筆者の発見した遺構は筆者が地名から命名し、仮称とした。

さて、多摩川上流域である青梅市域の土豪三田氏については、古くから多くの研究が行われてきた。しかし、奥多摩町をはじめとする、甲斐と武蔵の国境地帯については、奥多摩町（1981）や佐々木（1985）により、土豪の研究がなされており、特に奥多摩町誌は、杉田氏、三田氏、原嶋氏、田草川氏、といった国境地帯の土豪の動向を仔細にまとめている。このように、土豪の研究がなされているものの、城郭の研究は少ない。

とはいえ、当地域は武蔵と甲斐の国境地帯であり、国境を越える交通路や警備のための城郭が存在した。奥多摩町および青梅市域の、伝承地を含め、城郭の可能性のある地点をまとめたものが表1、図1である。本論では、これらの城郭のうち踏査、図化の必要性があるものを筆者自ら調査し、図化した「縄張図」を資料として使用した。縄張図とは、歩測で城郭の構造を計測し、ケバを用いて書き表したものである。

この研究では、多摩川上流域の青梅市、奥多摩町における、「境目」特有の道や城郭の使用形態を明らかにし、新知見を提供したい。

【図1】奥多摩町と青梅市の城郭所在地

城郭所在地の番号は表1と対応する。電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した。



【表1】青梅市と奥多摩町の城郭一覧（伝承地を含む）

東京都教育委員会（2013）と青梅市教育委員会（1991）の記述、図表を参照した。

青梅市				
番号	名称	別名	所在地・伝承地	遺構
1	今井城		今井1丁目	堀、土塁、曲輪
2	今井堀の内		今井2丁目	なし
3	勝沼城	師岡城	東青梅6丁目	堀、土塁、曲輪
4	辛垣城		二俣尾4丁目・ 成木8丁目	堀切、曲輪
5	久下氏館		富岡1丁目	なし
6	下長淵館	三田館	長淵1丁目	なし
7	下村堀の内		梅郷2丁目	なし
8	西城		二俣尾4丁目	なし
9	杉平柵		梅郷1丁目	なし
10	高山屋敷		成木2丁目	なし
11	館の城	東木戸、楯の城、 楯の沢砦、楯の柵	日向和田1丁目	堀、土塁、曲輪
12	常磐屋敷		成木7丁目	なし
13	成木堀の内	宮寺堀の内	成木2丁目	なし
14	浜竹の柵	中野柵	御岳2丁目	堀状地形
15	日向和田要害山城		日向和田2丁目	堀切、曲輪
16	藤橋城		藤橋2丁目	堀、土塁、曲輪
17	古屋敷		二俣尾3丁目	なし
18	報恩寺		今寺1丁目	堀
19	枅形山城		二俣尾4丁目	堀切、曲輪
20	御岳山城		御岳山	堀切、曲輪
21	矢倉台	物見櫓	日向和田1丁目	堀切
22	要害山		柚木町1丁目	なし
23	要害山		和田町1丁目	なし

奥多摩町				
番号	名称	別名	所在地・伝承地	遺構
24	尾崎の柵	将門柵	丹縄	なし
25	川野城山		川野	曲輪（伝承）
26	杉田屋敷		川野	不明
27	棚澤の城山	城山、将門遠見の城	棚澤	なし
28	氷川の城	城、将門の城	氷川	堀切
29	水根の城山	城山	水根	堀切

凡例

1. 本論に掲載・引用した史料・図・表には、必要に応じて番号とタイトルを付した。また、引用したものは、タイトル横に出典を記した。
2. 本論に掲載・引用した縄張図の描法は、本田昇「中世城郭の調査と図面表現」(『中世城郭研究』創刊号、1987年)および千田嘉博、小島道裕、前川要『城郭調査ハンドブック』(新人物往来社、1993年)に準拠している。
3. 本文中で出典を示す際、
 - 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第一 - 六巻』(東京堂出版、1989-1995年)に収録された史料は『遺文』+文書に振られた号数という形『遺文』～号で本文中に示す。
 - 下山治久『八王子城主・北条氏照:氏照史料から見た関東の戦国』(たましん地域文化財団、1994年)に収録された史料は『氏照史料』+文書に振られた号数という形『氏照史料』～号で本文中に示す。
 - 萩原龍夫・杉山博 編『新編武州古文書 上』(角川書店、1975年)に収録された史料は『武州古文書・上』+文書が所蔵されていた郡+文書に振られた号数という形『武州古文書』～郡～号で本文中に示す。
4. 本文中および註において、敬称を省略させていただいた。

第一章 国境地帯の入口：三田谷の城と交通路

三田谷とは、角川日本地名大辞典では、「戦国期に見える地名。(略)多摩川・入間川上流の現在の青梅市・飯能市一帯。この地域は中世において柚保と呼ばれた地域にはほぼ一致し、柚保の支配者勝沼城主三田氏の勢力圏という意味で三田谷と呼ばれたと思われる。(以下略)」と説明される。三田氏は多摩の土豪であった。

1 三田氏の討伐戦

享徳の乱以降、関東が戦国時代に突入すると、三田氏は山内上杉氏の麾下の武士として活躍し、ある時期に扇谷上杉氏に寝返ったようだ。

永禄2年に、小田原を本拠とし、当時伊豆、相模一帯に勢力を持っていた後北条氏が、各地方の領主と所領をまとめた資料、通称『小田原衆所領役帳』を作成する。その中に、「他国衆」として、三田氏の名が見えることから、三田氏は後北条氏と敵対関係にはなかったのだろう。

永禄3年、長尾景虎(上杉謙信)率いる軍勢は三国峠を越え、関東平野を縦断し、後北条氏の拠点小田原までの侵攻(第一次越山)を行った。上杉氏の軍勢は周辺の山内上杉氏や扇谷上杉氏の元被官を巻き込み、膨れ上がった。三田氏も例外ではなく、時の当主、三田綱秀(三田弾正少弼)は、上杉勢に加勢した(『氏照史料』〔参考〕一三号)。

翌永禄4年、後北条氏一族、北条氏康の次男で、氏政の弟。後北条氏領のうち多摩郡の統治を行っていた北条氏照は、上杉方に寝返った三田氏の討伐を行うことを決めたと考えられる。対後北条氏戦にあたって、三田氏は本拠勝沼(東京都青梅市)より上流部に新たに辛垣城、枅形山城を築いたと考えられている(図2)。

【図2】三田谷の城郭

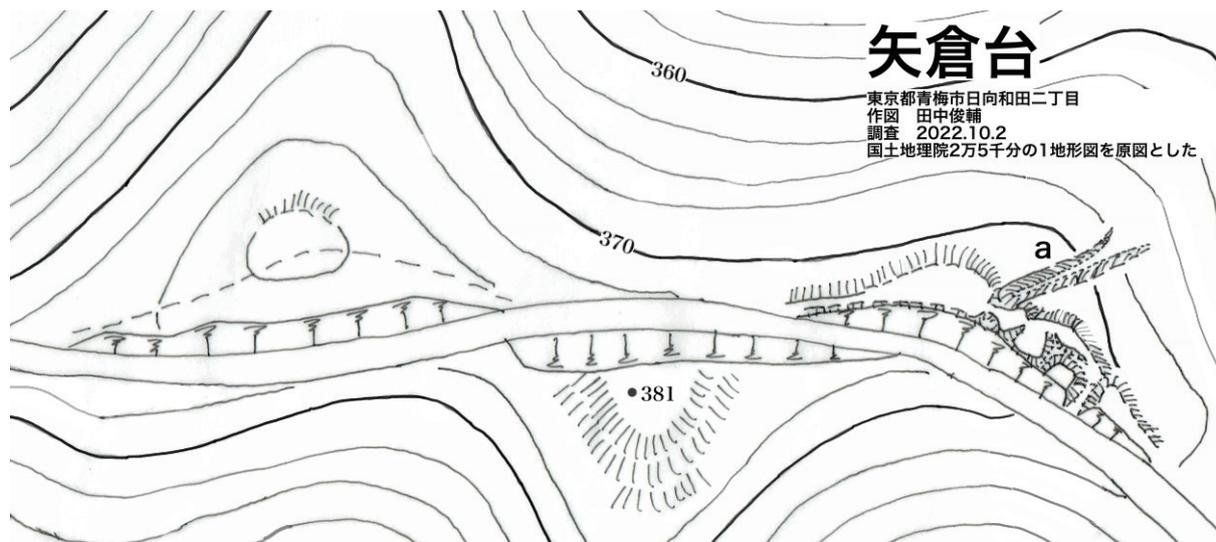
今昔マップon the webおよび電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した。



西股（2016）は、三田谷討伐戦の過程を復元し、辛垣城と栴形山城が協働しあって利用されたと指摘した。

これら二城については多くの城郭研究者に扱われているが、それに対してあまり認知されていないのが日向和田周辺の城郭遺構群である。その中で最高所に位置するのは矢倉台（図3）である。地元で「矢倉台」、「物見櫓」などと伝承されている場所だ。山頂部は自然地形だが、筆者の調査で、北側の峯に新たに豎堀 a と曲輪が確認できた（註3）。豎堀で制限された尾根筋は西の方が高くなっており、東の方向に対して尾根道を防御する目的を持っていた可能性がある。

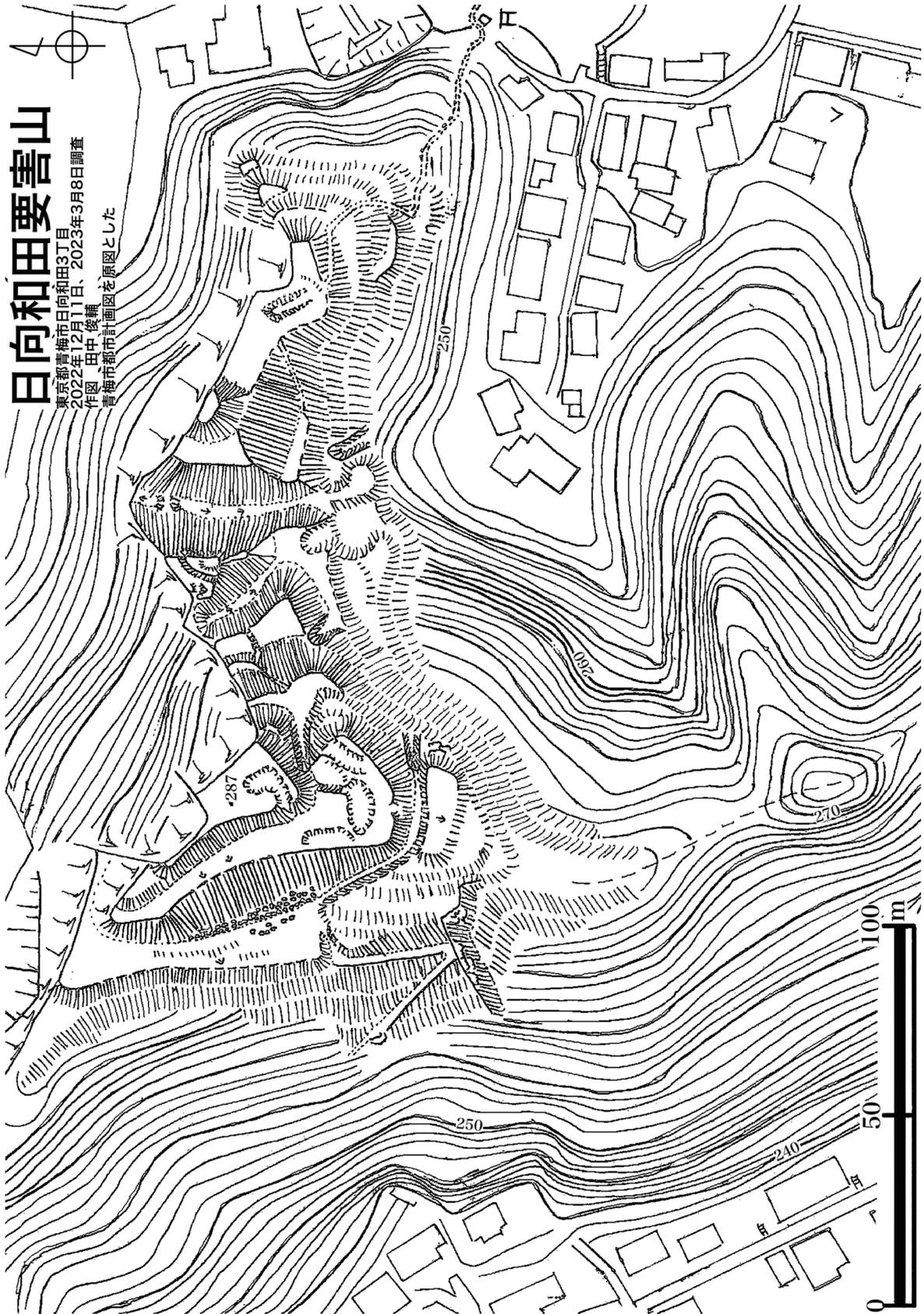
【図3】 矢倉台縄張図



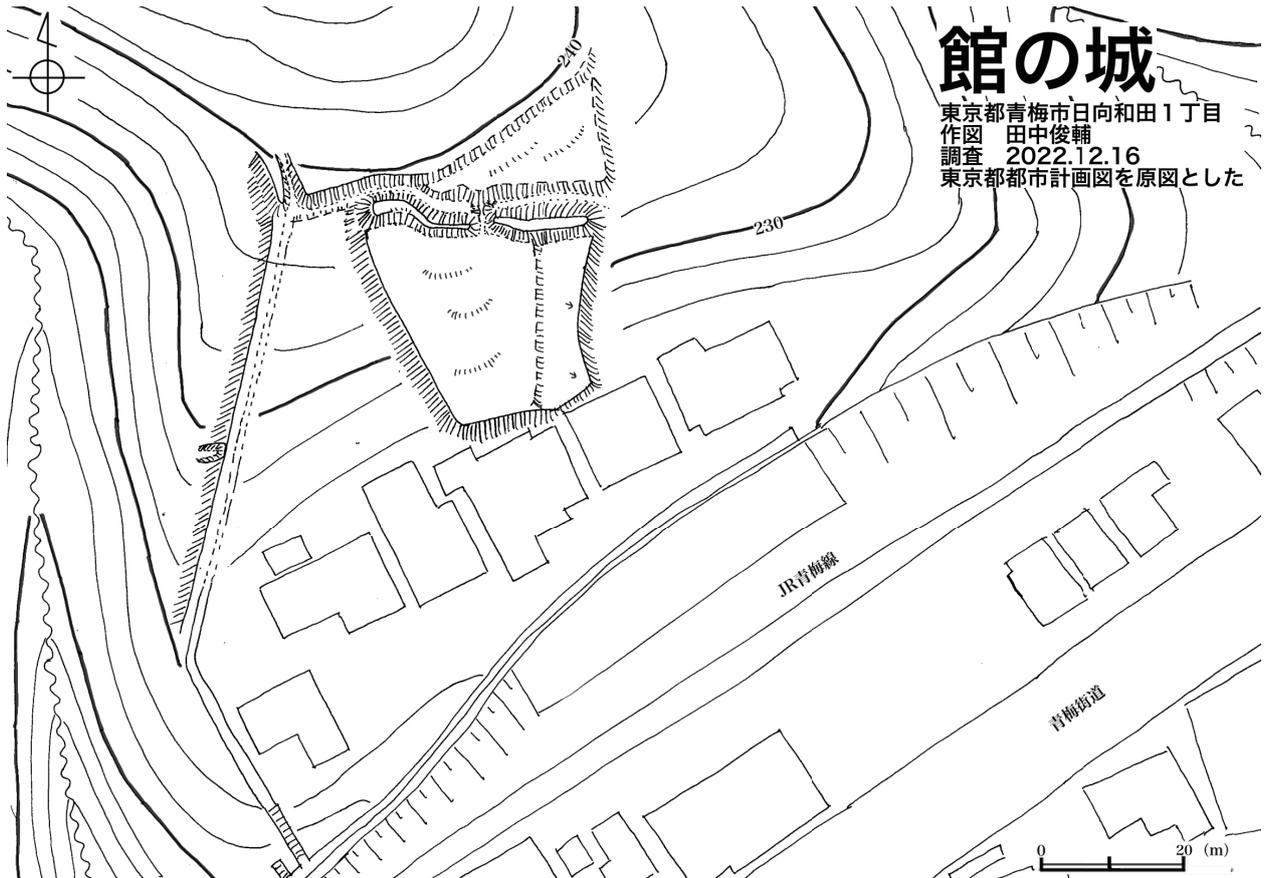
次に、日向和田の要害山の城郭遺構（図4）である。筆者が2023年に確認し、報告した遺構である。城の構造について詳しくは拙稿（註4）を参照頂きたい。この日向和田要害山の城郭遺構は他の遺構群より遺構、面積ともに規模が大きい。石灰採掘で破壊されているので、構造の考察は難しいが、巨大な堀切は、やはり東方向からの攻撃を意識しているように見える。

また、これら二つの城の直下に、館の城（図5）がある。クランクする1条の空堀で丘陵裾を独立させており、陣地として使用可能だが、曲輪内部が整地されておらず、居住性が低いのが特徴である。当城は三田谷の主要な交通路の青梅街道を見下ろす位置にあり、東京都教育委員会の記述（2013）では小規模な街道の側面陣地となり得ると評価されている。日本城郭大系（1979）などの、城域をより広いものとする見方もあるが、他の2つの遺構と連動して谷の交通を制限するものであったとすれば、図化した範囲のみが城域と考えても軍事的な合理性は損なわれない。当地域には「東木戸」の地名が残っており、辛垣城に対して「東」とみることも可能である。

【図4】日向和田要害山城縄張図



【図5】館の城縄張図



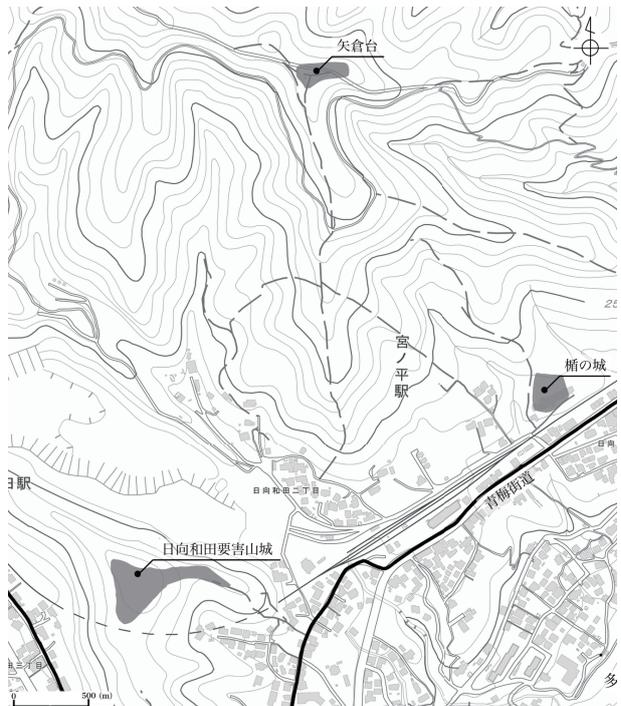
押さえる位置にある（図6）。また、矢倉台と日向和田要害山の城郭遺構については、三田谷の外側にあたる東への防御の意識がうかがえる。

使用時期は推定するしかないが、これらの遺構を辛垣城防衛のための前哨として理解することは可能である。また構造が簡素であり、進軍を遅らせるという役割を果たせばすぐに放棄されるものだっただろうと予想できる。

雷電尾根の対岸の尾根上には二箇所、要害山という山がある。これら二つの要害山と、日向和田要害山を含めた3つの要害山は地元では辛垣城の物見として利用されていたと伝承されていたそうだ（註5）。どちらの山にも遺構はないが、三田氏と関係があったのだろうか。

【図6】日向和田の城郭遺構

電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した。



2 当時の主要道を考える

最後に、北条氏照の三田氏討伐戦における侵攻経路や、史料から、当時の三田谷の主要な交通路がどのようなルートをとったのか、史料から考えてみる。

【史料1】谷合久信日記（『武蔵三田氏』 pp.58-59）

（略）同六年癸亥滝山ノ北条奥陸（ママ）守氏照三田江取カケ攻ル先手軍端ヲ渡檜沢ヨリ上ル員野半四郎ト云者村山之地頭也案内者故赤出立ニテ真先ニ上ルヲ鉄砲ニテ打ヲトサル此鉄砲者伊勢之竜太夫三田殿江一挺進上申也カラカイニモ三田八十騎防所ニ三田ノ家来塚田又ハト云者心カハリシテ城火ヲカケ焼上ルニヨリ綱秀不叶シテ城ヲ落ルトテ

（略）

慶長十七年壬子二月 日

太郎重久信

【史料2】武田信玄書状写（『都留市史 資料編 古代・中世・近世I』（都留市、1992年）一二〇）

（略）

一、敵三田之内築新地之由候、然者、氏康由井在陣、敵味方之間、隔三十里之様二聞届候処二、無行徒二在陣、如何様幸其方滞留候条、風聞之分可有注進候、（中略）

七月十日

信玄（花押影）

加藤丹後守殿

三田氏家臣の谷合久信が当時を思い出して書いた日記【史料1】によれば、北条氏照が滝山城から三田谷に向かい、軍端（軍畑、東京都青梅市）で多摩川を渡河し辛垣城を攻めたとある。また、三田氏討伐戦に際して武田信玄が家臣に送った書状【史料2】には、北条氏康は由井（東京都八王子市）に在陣していたとある。齋藤（2001）が指摘したように、由井は永禄4年段階で北条氏照の本拠であり、由井と軍畑を結ぶ道があったと想定できる。当時、当麻（註6）－櫛田（註7）－由井－勝沼－飯能－毛呂（註8）－鉢形（註9）を結ぶ主要な道「山の辺の道」があったことが知られている（註10）。この道の由井－勝沼間から軍畑へ抜ける道が分岐していたのだろう（図7）。

次に、三田氏討伐戦後の北条氏政の動きを追ってみよう。

【図7】山の辺の道と地域道

地理院地図vectorを用いて作成した。

黒線が山の辺の道。破線が想定される由井軍畑間の道。



【史料3】北条氏政書状写（『氏照史料』〔参考〕十六号）

十日之注進状、今日十一酉刻到來、仍当口之様体、度々申届候、不參着候哉、唐貝山責落、則當地高坂へ寄陣、就而秩父郡日尾之城、(中略)

九月十一日

氏政（花押）

太田新六郎殿

【史料3】は氏康の子、氏政が太田康資（新六郎）（註11）に関東の情勢を書き送ったものである。氏政も三田氏討伐に参加したのだろう。唐貝山（辛垣城）を攻め落としたあと、高坂（埼玉県東松山市）、秩父へ向かったという。このことは、先ほど述べた由井－軍畑間の道が秩父方面へ延びていたことを示しているように思われる。しかしこれだけの情報では断定に至らない。

ところで、三田氏討伐戦の性格を考える際、見落としてはならないの点は、三田氏は、応援が来るまで耐えればよかったということである。次の上杉氏の越山まで持ち堪えれば、北条氏照の攻勢も弱まることは間違いなかった。だからこそ、少ない兵力で滅亡を免れるため、多摩川の谷の奥まった場所に新たに城を築いたのである。この考えを推し進めて考えれば、三田氏が戦争後の「退却路」を用意していたという可能性は十分にあると考えられる。例えば、辛垣城の北西1kmほどにある榎峠を越えれば、三田氏の所領である名栗谷（埼玉県飯能市）であり、名栗谷を通過して妻坂峠（埼玉県秩父市）を越えれば、秩父盆地だ。八巻孝夫（1990）は、『新編埼玉県史』（註12）資料編六中世二 古文書二 七二八号の「上杉一揆、名栗谷を通、都摩坂を越、楯籠持山」という部分を引用して、上杉一揆が三田氏の残党であった可能性を指摘している（註13）。年代や、状況を考えると、妥当な論だと考えられる。とすれば、由井－軍畑－名栗－秩父というような地域道が想定できるといえよう。

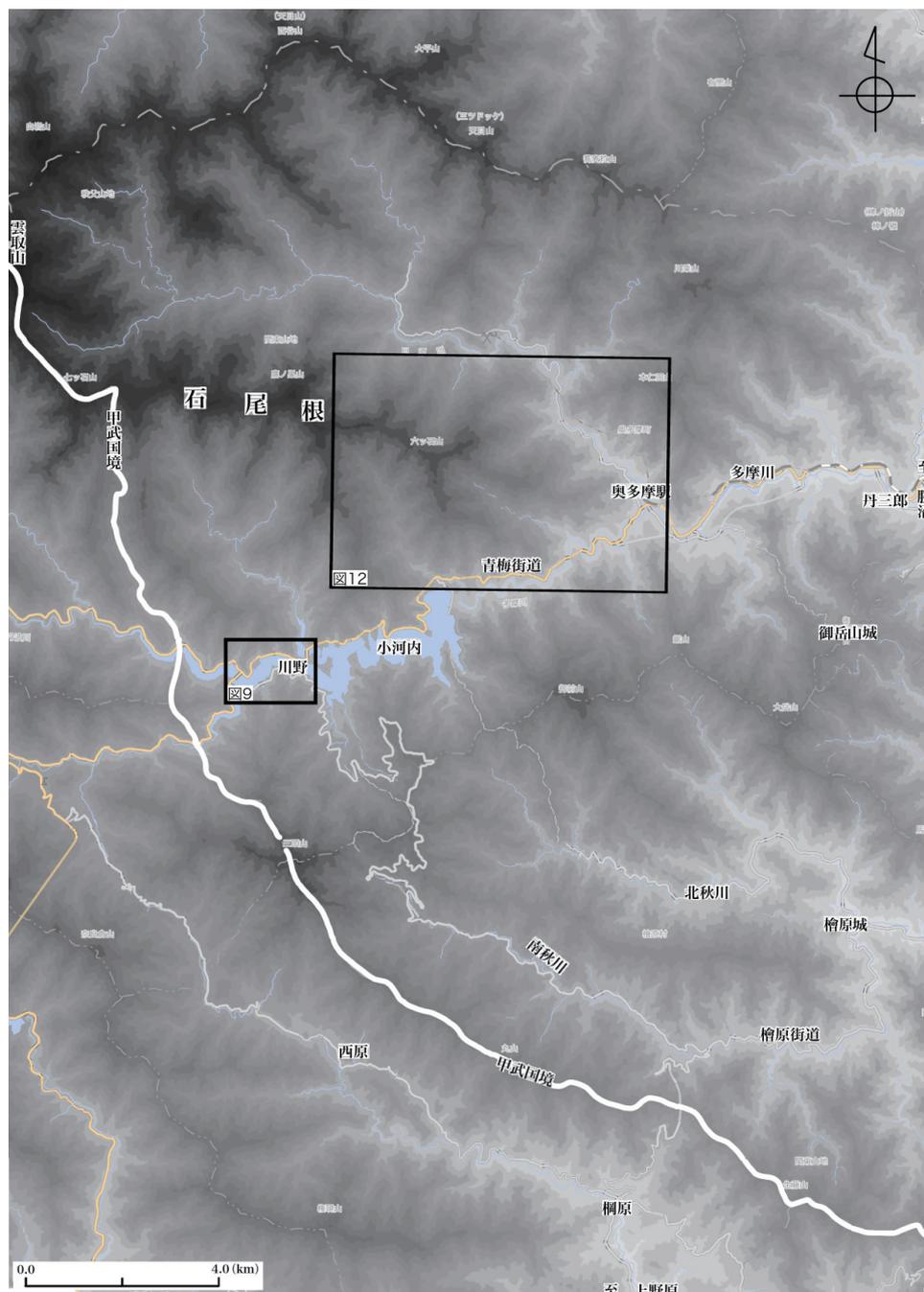
このように、三田谷には軍事的な緊張と共に多くの城郭が築かれた。その中には、日向和田の城郭遺構群のように、街道の封鎖を目的とした可能性があるものも存在する。また、由井や秩父盆地などといった他地域への交通路が三田谷での戦闘で大きな役割を果たした。

第2章 後北条氏の国境警備の城：御岳山城、檜原城

この章では、前章の時代から進んで、多摩地方を支配した北条氏照が、どのように城郭を運用したのか考え、それらの城郭が使用された状況を明らかにする。多摩川上流域で後北条氏による使用が確実なのは、御岳山城、檜原城の2城である。まず、今回扱う地域の周辺図（図8）を掲げておく。

【図8】多摩川源流域の広域図

地理院地図vectorを用いて作成した。また、図9、図12の図郭を付した。



1 御岳山城について

東京都青梅市にある、標高約 1,000m の霊峰で、武州御嶽神社のある御岳山には、城郭遺構が確認されている。

中田（1979）は、信仰の山である御岳山の山中に堀切などの遺構が散在していることを明らかにした。東京都教育委員会（2013）の記述では、遺構について、「城域は一見広大であるが、守備上のポイントは明快に絞られて」といると評価している。

このように構造はよく明かされている御岳山城であるが、北条氏照は、実際にこの城をどのように運用したのだろうか。それを窺えるのが【史料4】である。

【史料4】北条氏照刊物（『武州古文書・上』多摩郡 一八二号）

書出

（中略）

右今度師岡与今同時ニ御嶽山致籠城、抽而依走廻、本領被下置候、弥々可令忠信者也、仍如件、
（天正8年カ）十二月廿八日

氏照（花押）

野口刑部丞殿

【史料4】は、青梅市の土豪であり、かつての三田氏重臣、野口氏の一人が、先述した師岡氏と共に「御嶽山致籠城」の褒美として、青梅市域に土地を与えられたものである。この他、永禄12年に青梅市域の武士に御岳山城番へ向かうよう指示した書状（『氏照史料』一四五号）がある。北条氏照は、御嶽山を領地の境目を維持するための城として整備し、地元の武士に交代で番をさせたようだ。なお、境目維持のための番城や拠点城郭に武士を派遣する制度は、後北条氏領国の全域で見られることが分かっている。

また、御岳山城に触れた文書の中に、興味深いものがある。以下の【史料5】である。

【史料5】師岡山城書状（『遺文』四二二三号）

（端裏書）

「師岡彌二郎とのへ 山城

（切封）

たん三郎の屋しきへ、用所御たし候ハゞ、城下ニ候間、とかく申かた候ハゞ、山しろ一筆を持候由、おほせ候て御見せ候へく候、恐々謹言、
九月十日

師岡山城（花押）

この史料は、青梅の武家、師岡家の当主で、かつての三田氏重臣で、北条氏照の三田氏討伐後に勝沼城に入ったとされる（註14）、師岡山城守の書状だ。同族に対して、たん三郎の屋敷に行く際、そこは城下であるので、もし何か言われたら、自分の一筆を見せるよう書き送っている。丹三郎という地名が現在の奥多摩町古里の近くにあり、この書状のたん三郎もそこを指しているのだろう。

師岡氏と丹三郎原嶋氏は親密な関係にあった。ここで注目すべきは「城下」という表現であり、丹三郎が御岳山の直下にあることと、丹三郎周辺に御岳山城以外の中世城郭は確認されていないことから、丹三郎が御岳山城下と認識されていたことは間違いないだろう。具体的に城下というものがどのような施設を指しているのか不明だが、「とかく申かた候ハゞ」などと書いていることを考えると、何らかの監視所的な役割が想定できる。多摩川沿岸の道としては、江戸時代、多摩川左岸に数馬の切通が開通するまで、右岸の大橋峠を越える道と左岸の根岩越えの道が利用されていたと考えられ（註15）、丹三郎はそれら二つの道が再び多摩川沿いとなる地点に位置する。当時、八王子市の和田峠越えの道や、清瀬市の清戸などの主要な道には、番所が設けられていたことが分かっている（註16）。

以上のことから考えると、御岳山城自体は高所に位置していたものの、山麓に監視所のような施設が設けられていた可能性がある。

2 檜原城について

檜原城は、「境目」の最前線の城として、後北条氏に使用された。まず、檜原城の使用形態をみてみよう。檜原城は、文書から、地元の武士、平山氏が在城する番城であったことが分かっている。では、檜原城がどの地域を防衛したのか考える。

【史料7】氏重判物（『武州古文書・上』多摩郡 一五八号）

此度於小郷内油虫道、敵一人合打致候、無比類次第二候、於此上も玉走廻付而者、引立可召仕候、爲後日可勤 出候、仍如件、

卯月十九日

氏重（花押）

坂本四郎右衛門との

【史料7】は、天正9年、小河内にて武田勢と北条勢の小競り合いがあった際、小河内での戦果を氏重が讃えたものである。このことから、檜原城に在城していた氏重の守備範囲は、現在の檜原村域と小河内を併せたものだったと推測できる。昭和戦前期までは小河内の集落は檜原村経由で五日市方面に出ることが普通だったようだ（註17）。当時も、檜原-小河内間の地域道があったことだろう。

檜原城の注目すべき点は、文書から後北条氏最末期に改築・使用されたことが分かる点である。後北条氏は天正18年、豊臣政権によって滅ぼされる。その直前の史料が【史料8】、【史料9】、【史料10】である。

【史料8】北条氏照朱印状写（『遺文』三二六四号）

一、此度就陷弓矢、當郷二有之爲男程之者、先年之任吉例、檜原谷爲御加勢被仰付候、平山右衛門大夫一左右次第、速爲男程之者、彼谷へ相集、可走廻候、他所へ於罷越者者、從類共二可被處死罪事、

一、於檜原相渡普請之儀、是又無々御心得可走廻事、

右、大途就御弓箭、如此被定置候、此掟於相背者者、可被處死罪旨、被仰出者也、仍如件、

戌子（天正 18 年） 正月九日

西戸藏

【史料 9】

天正十六戊子年五月十一日打死
實際院殿心解了脱大禪定門
子八月朔日 檜原溪平山右衛門太夫平氏繁
道常大禪定門
右同平山新左衛門尉平氏虎
右同歳同月十日ノ夜
峯輪院殿龍雲孟虎大禪定門
戸倉郷小宮上野佐平氏季

【史料10】 上杉景勝・前田利家・木村一連署禁制（『武州古文書・上』 多摩郡 一一八号）

禁制 武州多西郡小宮谷 吉祥院
一 當手軍勢濫妨狼藉事、
一 陣取事、
一 對寺家門前輩、非分之儀申懸事、
右條々任御朱印之旨、堅令停止訖、若於違犯之族者、乍可被處嚴科之由、仍仰執達如件、
天正十八年六月 日

常陸介（花押）
筑前守（花押）
越後宰相中將（花押）

まず、西戸倉（東京都あきる野市）の百姓が檜原に助力することが幾度かあったことが【史料 8】の「先年之任吉例」という表現から分かる。また、「於檜原相渡普請之儀」というところから、後北条氏最末期の檜原城が西戸倉の百姓によって改築されたと分かる。

【史料 9】は、五日市の商家、市之丞家にあった檜原城主親子と戸倉城主の位牌の写である（註 18）。檜原城主とされる平山右衛門大夫氏繁（氏重カ）の戦死が記録されている。檜原城周辺で戦闘があったのだろうか。

【史料 10】は、豊臣秀吉の北陸支隊が檜原城山麓直下の吉祥印に対して出した禁制（註 19）である。この禁制から、檜原城周辺でも何らかの戦闘があったことが予想できる。その際、檜原城は開城、あるいは落城したのだろう。

ここまで、檜原城がどのように運用されたかをみてきた。北条氏照の番城として、御岳山城と同じような扱いを受け、後北条氏と滅亡をともにした城であった。

3 北条氏照の境界認識と番城の役割

これらの番城はどんな状況下で使われたのだろうか。御岳山城は使用された状況を文書から見る
ことができないので不明だが、檜原城については

- ① 天正9年の武田氏との小競り合い
- ② 天正18年の豊臣政権による後北条氏侵攻

の少なくとも2回で使われたことが分かる。

齋藤(2010)は、後北条氏の番城制度が天正10年代に集中していることを指摘している。多摩
山間部においても、天正10年の武田氏滅亡によって後北条氏に対する織豊政権の脅威が増大した
のを期に、番城が使用された可能性は指摘できる。

さて、ここまで境目の後北条氏の番城の形質を見てきた。ここでその特徴をまとめてみよう。

- ① 主要道を意識した築城がなされている
- ② 敵対勢力の変化により必要性が増した時だけ使われた可能性がある
- ③ 国境地帯の小競り合いの戦闘拠点として使用された
- ④ 複雑な構造は必ずしも必要ではない

以上が今回明らかにできた北条氏照の番城の特徴である。また、番城の実態から、北条氏照の境
界認識も見えてくる。後述するが、小河南などの、現在の東京都西端にあたる地域は、後北条氏領
国でありながら実態は不安定な地域だった。北条氏照が番城を境目維持の要として、それより奥の
地域に派兵したということは、番城である御岳山城・檜原城より東側が、確実な後北条領国と認識
されていたことを、逆説的に示していると言えよう。

第三章 国境地帯の交通路と城郭

この章では、多摩山間部に存在する城郭のうち立地や規模が特異なものを扱い、特異な城を築かせた境目特有の状況を明らかにする。

1 国境地帯の民衆たち——小河内と檜原を例に

川野集落周辺の小河内の地域（図8参照）では、多摩地区を支配した戦国大名北条氏照が、自国領と認識し、小河内衆と呼ばれる家臣団を設けていながら、武田領と近接しており、非常に不安定な領地だった。この項では、国境地帯の民衆の実態を史料から考える。

【史料11】 武田家印判状（『武州古文書・上』多摩郡 一六六号）

定

（中略）

已上、

於今度深澤之城、別而致奉公侯之間、被加御褒美者也、仍如件、

元龜二年梓 未辛

二月十三日

（龍朱印） 山縣三郎兵衛尉
田草川新左衛門尉 奉之

【史料12】 北条親富書状（『遺文』四一一二号）

御懇のふみ給候、仍下よりのわらへ之儀、一人■つけおき申候處ニ、このはうへ御越なく候て、あとへ御返し可有よしうけたまはり候間、先、兩四人へあつけ申候、如何さまするかより罷歸候ぐたんから申へく候、さかひめ之儀と申、重而此方より罷下候もの、御しやうにんになられ候ハゞ、しあん申候ても可有之候、委者甚左衛門へ申付候、委曲重而恐々謹言、

九月廿八日

喜多右（ママ）親富（花押）

杉田入道殿

同右近丞殿

原島七郎右衛門尉殿

同七郎左衛門尉殿

まいる

【史料11】は、栃久保（東京都奥多摩町）の武士田草川氏らに対する武田家の印判状で、元龜二年、後北条氏の城である深澤城（静岡県掛川市）攻めに参加した褒美が与えられている。【史料12】は、後北条家の家臣と思われる喜多右親富（註20）が、小河内の土豪に人質について書き送った書状で、後北条家の影響が小河内まで及んでいたことを示す。また、【史料11】からは、奥多摩の土豪の一家、田草川家と武田氏との関係が良くうかがえるが、面白いことに、田草川家は北条氏照からの合戦に関する書状も蔵している。また、【史料11】、【史料12】から、小河内には後北条氏以外の様々な勢力が影響を及ぼしていたと言えそうだ。

さらに、小河内では村人の他国への欠落が多く発生していたことが史料から窺える。

【史料13】北条氏照朱印状（『遺文』二三三二号）

境目之儀、武州之儀者、此方之本地候、鶴郡之儀者、甲州領候、大河内之儀、勿論武州之事候間、何も此方へ可罷移旨、被仰出候也、仍如件、

午（天正一〇年）卯月七日

大河内

百姓中

【史料14】北条氏政書状写（『遺文』四二五八号）

慥以飛脚申候、抑其以來者、不申承候、何事御座候哉、承度存候、仍我々召仕百姓、連々其口へ總數多取移候、其方憑入候之間、可返給候、北右（北条親富）へ此分申度候得共、早竟任入候、可然様ニ御取成尤候、恐々謹言、

七月十二日

枕流齋 行韻（北条氏政）（花押）

杉田右近丞殿 御宿所

【史料13】は、北条氏照が小河内に対して宛てたもので、甲州と武州の境目を定めている。天正10年、武田氏滅亡により甲斐が織田氏の領国になるのに伴ってのことだろう。【史料14】は（註21）が、「我々召仕百姓」が、小河内へ逃げていくから、返してほしいと書き送ったものである。【史料13】からは、小河内の村人たちは容易に国を越えた移動ができたことが予想できる。小河内でも、村人の欠落（註22）が多発していたのだろう。【史料14】からも、小河内が、百姓が他国へ逃げる際の溜まり場ようになっていたことが示唆される。このように、領国を簡単に越えられる国境特有の状況から、多くの人々が国境地帯に集まってきたのだろう。

では、もう一つの国境地帯・秋川上流はどうだっただろうか。天正年間、後北条氏と武田氏領の間で小競り合いが多発し、檜原村周辺の南秋川の谷から上野原方面への派兵が何度か行われたようだ（図8参照）。その時の史料を見てみよう。

【史料15】北条氏政感状（『武州古文書・上』多摩郡 一三六号）

御書出

右今度檜原衆、鶴郡讓原へ、相動處、抽粉骨走廻、敵一人討捕候、神妙之至候、仍被成御感状旨、被仰出者也、仍如件、

辛巳（天正9年）五月三日

松田四郎右衛門尉（註23）

来住野善二郎殿

【史料16】某印判状（『武州古文書・上』多摩郡 一五七号）

五月十五日、於才原敵討捕候、神妙ニ被思召候、仍俵子被下候、向後弥輕身命於走廻者、御恩賞任望可被旨、被仰出者也、仍如件、

庚辰（天正8年）

六月八日

坂本四郎左衛門

【史料15】は、五日市の武士来住野氏が讓原（桐原、山梨県上野原市）で戦果を挙げたときの感状、【史料16】は坂本四郎左衛門が才原（西原、山梨県上野原市）で戦果を挙げたときの感状である。これらの史料からわかるように、当時の武田氏との戦争のほとんどは国境近くの村で行われていた。

【史料17】北条家朱印状寫（『遺文』二二二六号）

去十七、讓原之内井出小屋打散砌、敵一人討捕候、神妙被思召候、仍御太刀被下者也、

卯月十九日

幸田 奉之

小崎彦六とのへ

【史料17】は、武田氏との小競り合いの際に武功を挙げた武士小崎彦六（註24）に対する感状である。讓原の「小屋」を攻撃したようだ。松岡進は、「小屋」の性格について、「小屋」が簡易・小規模な城郭を指す場合があるとした上で、「境目における在地的・民衆的な勢力のよりどころとなっている点に大きな特徴がある。」としている（註25）。讓原などの国境の村で「小屋」が築かれたことは興味深い。国境地帯で民衆による自衛が必要とされたことを如実に表していると言えよう。

2 川野城山について

小河内ダム（東京都奥多摩町）建設でダム底に沈んだ川野集落には、城山が存在したとされる（図9）。

郷土誌からも、それが遺構を備えたものだったことは明らかである。

安藤（1993）によれば、川野城山は地元の名主杉田氏の屋敷の向かいの山に位置し、二つの曲輪で構成されていて、二箇所には虎口があり、現在でも奥多摩湖の水位が25mほど下がると頂部の曲輪が見えるのだという。前項で述べたような国境特有の状況から、川野城山は村落自衛のために築かれた城だったであった可能性がある。

【図9】川野城山とその周辺

『多摩のあゆみ 第176号』（多摩中央信用金庫、1976年）より湖底の復元地形図を引用した。

「川野」の印字の南の、突き出した尾根が川野城山。

方位記号、スケールバーは筆者。

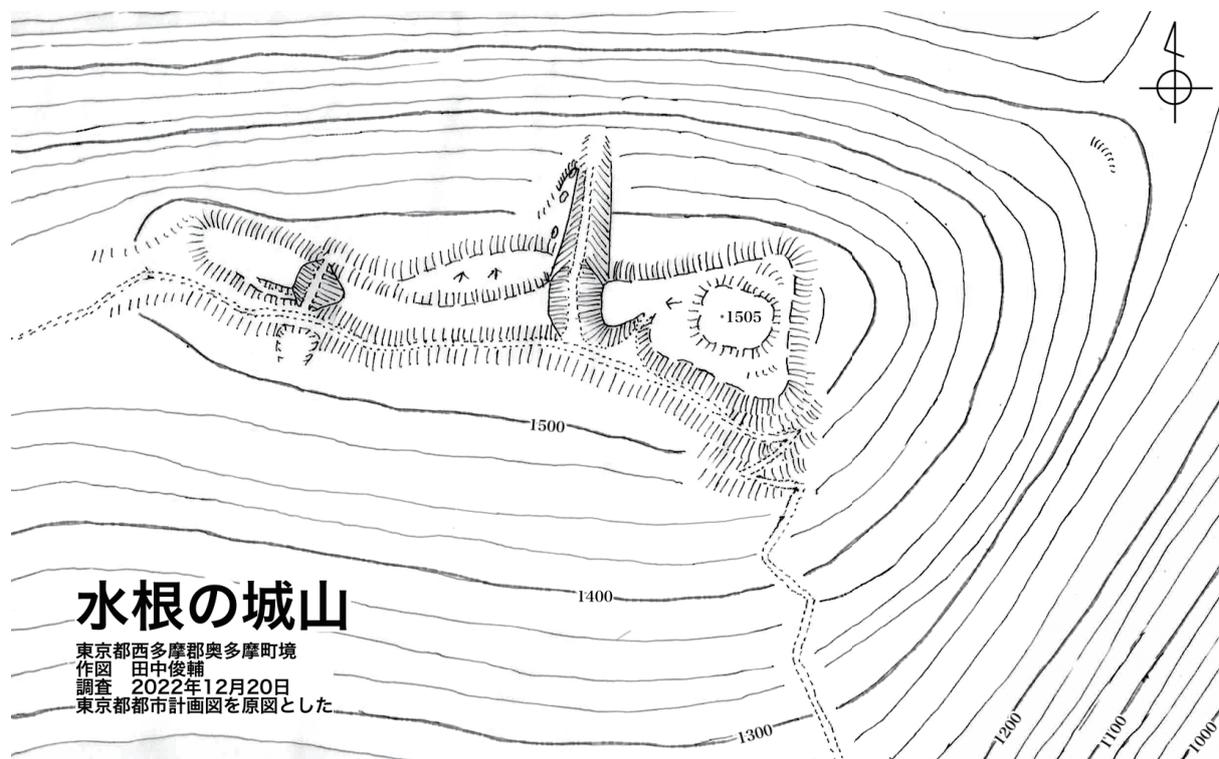


3 水根城山城について

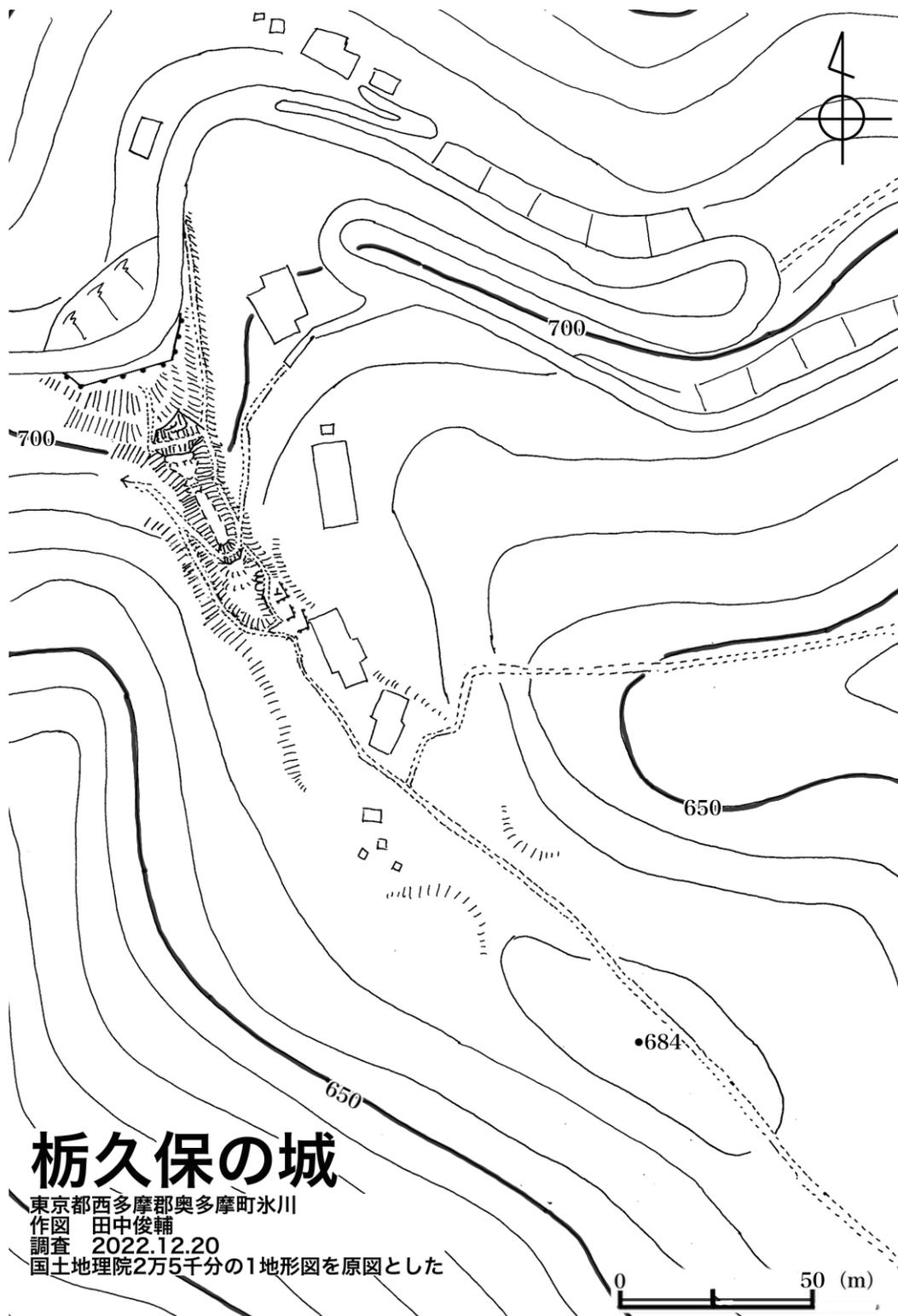
奥多摩町水根の、標高約 1500m の城山の近くに、城郭遺構が見られる (図 10)。

尾根筋に 2 条堀切を設け、小ピークを独立させている。曲輪内部は整地されていない。この堀切状遺構は、豎堀となって斜面を下っており、切り通しなどの城郭以外での用途は想定しにくい。また、最高所の曲輪には虎口状遺構が付随する。この遺構が城郭であることは間違いない。しかし、水根の城山は余りにも高所に、余りにも山深い場所に位置する。登山道が整備された今ですら、奥多摩から徒歩で優に二時間以上かかる (註 26)。この城が集落支配などのために作られたことはあり得ない。なぜこんな場所に極小の城郭が築かれたのか。その理由を考えるため、近隣の城郭について検討してみよう。

【図10】水根の城山縄張図



【図11】 栃久保の城縄張図



4 栃久保の城について

水根の城山が位置する石尾根を奥多摩駅方向に下ったところに三ノ木戸山がある。その南にあるのが栃久保の城（図 11）である。城という名の集落から突き出す尾根が城郭という伝承があり、平将門の伝説が遺る（註 27）。筆者が踏査してみたところ、図のように堀切状遺構 a が確認されたが、守るべき範囲が分かりにくく、堀切からすぐ道が続いており、切通しとも思われることから、

城郭遺構かどうか不明だ。しかし、伝承や地名を尊重し、何らかの施設があった可能性を指摘しておく。

以上の水根の城山、栃久保の城は、山麓の集落から離れており、村落自衛の城であったとも考えられない。筆者はこのような城が築かれた背景として、秩父と奥多摩を結ぶ主要な道の存在があったのではないかと考えた。その理由として、まず、周辺に三ノ木戸などといった道に関係する地名があることが挙げられる。水根の城山が位置する石尾根は、

雲取山（東京都奥多摩町）から派生する長大な尾根で、終始幅広で通行が容易である。そして、石尾根経由で雲取山、その先の秩父や甲州へと移動が可能である。そして、その石尾根の末端部に城旧道と呼ばれる、氷川集落と城集落を結ぶ古道がある。つまり、氷川－城集落－三ノ木戸－石尾根という交通路を想定すれば水根の城、栃久保の城の存在を合理的に理解出来る（図 12）

もう一つこの説の補強となりそうな事例を挙げておく。水根の城山によく似た高所の簡素な城郭の例として、富山県の杉山砦の例が挙げられる。杉山砦は、富山県南砺市城端町に在する堀切 2 条だけの簡素な城郭である。標高 1100 m 圏に位置するが、佐伯（2022）は、近隣の交通の要所である杉尾峠を強く意識した築城と評価している。水根の城山も交通を意識した築城と考えるのが妥当ではなかろうか。

【図12】 想定される石尾根の交通路

電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した。



結論

本論では、永禄4年、三田氏は領地に工事を施し、後北条氏の侵攻に対策しており、その過程で後北条氏の進行経路と退却路を意識した築城が行われたことや、日向和田の城郭遺構といった街道封鎖を目的とした遺構も築かれたことが分かった。そして、三田谷を占領したのちの後北条氏が、多摩川上流の谷にも、和田峠越えの道や檜原の口留番所のように番所を設けていた可能性を指摘できた。番城について、三田氏が討伐された永禄4年を画期として、国境を防衛する後北条氏の支配が一気に進んだことは間違いない。

また、国境地帯の特異な高所城郭の築城目的に迫ることもできた。多摩地方の山間部においても、主要道の監視という普遍的な目的で築城が行われたことは注目に値する。このことは、当時の多摩山間部が決して「行き止まり」などではなく、境目の向こう側への入口であったことを示しているからである。小河内が後北条氏の領土として不安定な場所であったことも、国境地帯の流動性を示していると言える。

最後に、国境地帯の道と城郭について、普遍的な特徴を抽出してみる。注目すべき共通点は、交通路の監視目的で築かれた城郭について、尾根の交通路に対する築城が多い事である。矢倉台や、御岳山城、水根の城山などは尾根上の交通路に対するものとして理解できる。戦国期の当地域での移動に、谷だけでなく尾根が使用されたことが窺える。

このように、城郭は国境地帯の流動的な状況に伴って次々と築かれた。そして、番城や街道封鎖の城は主要道を意識して築城されていた。また、民衆による自衛のための築城も行われたようだ。これまで顧みられてこなかった史料や城郭遺構から、甲武「境目」地域における道と城郭の在り方を指摘出来たことは、本論の成果と言えよう。

今後、奥多摩町周辺のみならず、甲斐側の事例や、他の後北条氏両国の国境地帯も研究対象としていきたい。

参考文献

書籍

1. 東京都教育委員会 編『東京都の中世城館』（戎光祥出版、2013年）
2. 青梅市郷土博物館 編 池田誠、池田光雄、斉藤慎一、佐伯正廣、田中祥彦、藤井尚夫、藤本正行、本田昇、三島正之、八巻孝夫『資料青梅市の中世城館跡』（青梅市教育委員会、1990年）
3. 小幡晋『多摩の古城址』武蔵野郷土史刊行会、1978年）
4. 中田正光『村人の城・戦国大名の城 北条氏照の領国支配と城郭』（洋泉社、2010年）
5. 西股総生『「東国の城」の進化と歴史』（河出書房新社、2016年）
6. 峰岸純夫、齋藤慎一編『関東の名城を歩く 南関東編』（河出書房新社、2016年）
7. 佐伯哲也『北陸の名城を歩く』（吉川弘文館、2022年）
8. 黒田基樹 編『武蔵三田氏』（岩田書院、2011年）
9. 齋藤慎一『中世東国の道と城館』（東京大学出版会、2010年）
10. 安藤精一『奥多摩歴史物語』（百水社、1993年）
11. 藤木久志『土一揆と城の戦国に行く』（朝日新聞社、2006年）

12. 高橋源一郎『武蔵歴史地理 第六冊』（有峰書店、1972年）
13. 児玉幸多 坪井清足監修『日本城郭大系』第五卷（新人物往来社、1979年）
14. 間宮士信等原編 蘆田伊人編集校訂 根本誠二補訂『新編武蔵風土記稿』（雄山閣、1996年）
15. 藤木久志、黒田基樹 編『定本 北条氏康』高志書院、2004年
16. 蘆田伊人 編集校訂、根本誠二 補訂『新編武蔵風土記稿』（雄山閣、1996年）
17. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第1巻』（東京堂出版、1989年）
18. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第2巻』（東京堂出版、1990年）
19. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第3巻』（東京堂出版、1991年）
20. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第4巻』（東京堂出版、1992年）
21. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第5巻』（東京堂出版、1993年）
22. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第6巻』（東京堂出版、1995年）
23. 佐藤栄智 編『小田原衆所領役帳 戦国遺文後北条氏編別冊』（東京堂出版、1995年）
24. 下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編補遺編』（東京堂出版、1995年）
25. 下山治久『八王子城主・北条氏照:氏照史料から見た関東の戦国』（たましん地域文化財団、1994年）
26. 萩原龍夫・杉山博 編『新編 武州古文書 上・下』（角川書店、1975年）
27. 奥多摩町誌編纂委員会『奥多摩町誌 歴史編』（奥多摩町、1985）

論考

28. 齋藤 慎一（2001年）「戦国期『由井』の政治的位置」齋藤慎一『中世東国の道と城館』東京大学出版会、2010年
29. 並木米一「武州山の根の道」『多摩のあゆみ 第5号 多摩の道』多摩中央信用金庫、1976年
30. 加藤哲「辛垣城合戦と三田氏の没落」『多摩のあゆみ 第17号 多摩の古戦場』多摩中央信用金庫、1979年
31. 湯山学「武蔵西党の小宮氏」『多摩のあゆみ 第25号 武蔵武士』多摩中央信用金庫、1981年
32. 佐々木秀明（「辺境の地“境目”と周辺の武士」『多摩のあゆみ 第40号 滝山城から八王子城へ』多摩中央信用金庫、1985年
32. 伊藤博司「多摩川上流域の中世的景観—青梅市域を中心として—」『多摩のあゆみ 第90号 室町・戦国期の多摩—城館・生活・文化—』多摩中央信用金庫、1998年

註

1. 齋藤慎一「境界認識の変化」齋藤慎一『中世東国の領域と城館』吉川弘文館、2002年を参照。
2. 東京都教育委員会 編『東京都の中世城郭』（戎光祥出版、2013年）を参照。
3. 伊藤博司「多摩川上流域の中世的景観—青梅市域を中心として—」『多摩のあゆみ 第九〇号 室町・戦国期の多摩—城館・生活・文化—』多摩中央信用金庫、1998年では北側に堀切があるとしているが確認できない。
4. 拙稿「青梅市要害山の城郭遺構」（『中世城郭研究 第37号』中世城郭研究会、2023年）を参照。

5. 日向和田要害山について触れた『青梅の本』執筆者の一人の談だが、又聞きなので参考程度にとどめておきたい。
6. 神奈川県相模原市
7. 東京都八王子市
8. 埼玉県毛呂山町
9. 埼玉県寄居町
10. 齋藤 慎一「戦国期『由井』の政治的位置」齋藤慎一『中世東国の道と城館』（東京大学出版会、2010年）;齋藤慎一「中世東国の街道とその変遷」埼玉県立歴史資料館 編『戦国の城』（高志書院、2005年）を参照した。
11. 北条氏康に従属し、江戸城代であった。岩付城主、太田資正の同族。
12. 埼玉県 編『新編埼玉県史』（埼玉県、1979）
13. 青梅市教育委員会『資料青梅市の中世城館跡』（青梅市教育委員会、1990）の辛垣城の項参照。
14. 青梅市教育委員会『資料青梅市の中世城館跡』（青梅市教育委員会、1990年）の勝沼城の項参照。
15. 大館勇吉（1976年）「奥多摩の古道」『多摩のあゆみ 第五号 多摩の道』参照。
16. 『戦国遺文』二四一六号;齋藤慎一「後北条氏領国の『境目』と番」齋藤慎一『中世東国の領域と城館』吉川弘文館、2002年を参照。
17. 大館勇吉『奥多摩歴史散歩』（有峰書店新社、1992）p.230参照。
18. あきる野市教育委員会文化財課「その29 八王子城落城以前に落城していた戸倉城と檜原城」（あきる野市、発行年不明）を参照。
19. 自軍の掠奪などを禁じる安全保障証。
20. 喜多右とは喜多条の誤写と考えられる。北条親富は越後北条（きたじょう）氏の北条高広の同族としてその名が文書に見える。なぜ越後北条氏が小河内に書状を出し、人質について書き送っているのかは不明だが、越後北条氏は北条氏康と同盟関係にあった時期があるので、その頃のものだろうか。
21. 枕流斎は北条氏政の雅号と考えられる。
22. 藤木久志によって、戦国時代を通して、不作や疫病を理由とした村人の「退転」（村や百姓の没落）、「欠落」（村人の離散）が起こったことが明らかにされている。
23. 北条氏照の家臣団の一人である。
24. 不詳。清戸三番衆状には「小佐久」の名が見えるが、関係は不明。
25. 用語の持つ意味について、松岡進「氏康期の北条領国における城館と戦争」藤木久志、黒田基樹 編『定本 北条氏康』（高志書院、2004年）を参照した。
26. 山と溪谷社 編「大きな地図で見やすいガイド 高尾・奥多摩」（山と溪谷社、2015年）参照。
27. 間宮士信等原編 蘆田伊人編集校訂 根本誠二補訂『新編武蔵風土記稿』第五卷（雄山閣、1996年）栃久保村の項参照。